

内桶功一さんの神田の思い出談義(2012.2.21)

今回は電機学校草創期以来の守護神である、旧南明座(安い入場料で映画をみせてくれた)裏の小川町「五十稲荷神社」(通称ゴトウ様、学校横の道で昭和30年代の初めまで、五と十の付く日の夜毎に盛んに縁日をしていた)と本館の真裏で10号館横奥隣の「豊川稲荷神社」(江戸天下祭の記念として販売された千代田区区民生活部発行の江戸・東京をたずねて千代田まち事典には東京電機大学構内に鎮座していると記されている)の豊川稲荷様の方の写真を添付します。

錦町の由来 江戸時代この界隈は武家屋敷が軒を連ね 錦小路とよばれていました、一色という名の旗本の家が2軒あって 二色小路 と呼ばれたのが 錦となった、この地にあった護持院に錦のように美しい虫を祀った弁財天堂があった、京都の錦小路を懐かしく思いあやかった、との言い伝えがあります。

7号館が建つ以前の建物には中央大学が入っていましたが、元々は千代田区役所の建物でした、中大は神田警察の向かい側に明治18年に前身の、英吉利法律学校が開学、のちに東京法学院となり中央大学と改名になりました。

電機学校は明治40年に間借りしたりで小川町で創立され幾度も移転を余儀なくされ昭和になって錦町に移ったとされています。

小川町の由来、古くは鷹狩につかう鷹の飼育をした鷹匠が住んでいた元鷹匠町が五代将軍綱吉の「生類哀れみの令」で鷹狩を禁じられたため小川町となった。このあたりに清らかな小川がながれていて「小川の清水」と呼ばれる池があった。江戸城を築いた室町時代の武将「大田道灌」が、「むさし野の小川の清水たえずして岸の根芹をあらひこそすれ」と詠んだそうです。

昭和23年に疎開から戻り私の住んでいた小川町の交差点角地には戦時中の空襲による焼夷弾で真っ黒く焼けた焼死体が高く山積みされていたのを後に写真で見てショックを受けました。

市ヶ谷基地と日比谷司令部基地の間を米軍の戦車・装甲車・ジープ等の軍用車が事故を起こしても止まりさえせず猛スピードで走っていた昭和20年代中頃まで小川町を貫く靖国通り南側の道端には、電機学校が近かったのと日比谷の占領軍司令部の基地が近かった関係で、旧日本軍や占領軍(主に米軍)から大放出された装備品の、特に電気関係の品を扱う露天商が沢山ならんで、ムシロを広げてトランス・大きなコンデンサー・真空管(メタル管が主)・コイル類・メーター・モーターとあらゆる部品を売っていました。

後に、これらの露天商たちは秋葉原駅前の空き地に移動させられて、無秩序に多くの狭い小屋を建て商売を始めましたがやがてすぐに、全焼する大火災を起こし現在の区画に整理されて秋葉原電気街が誕生しました。

本館裏の10～14号館のあたりには小学校の同級生の印刷屋が何軒もありましたが、今や小川町・錦町には、地元で育った人はほとんど住んでません。

昭和 20 年代、5 号館の場所は空襲の爆撃でほとんどが破壊されたビルの残骸で危ないのと、爆撃により亡くなった人々の悲惨な話を聞かされて子供の私達は怖くて近づけませんでした。

茨城から初めて神田に戻った時は、上野から小川町まで路面電車の都電に乗りましたがその途中は焼け野原ばかりで小さな小屋が点在するだけでしたので、やけに明るい景色だったのを 6 歳の子供でしたが覚えています。

お江戸の守り神である神田明神社殿裏の崖からは上野の忍ばず之池まで見渡せたほどの広い焼け跡でした。小川町北奥の大田姫神社と旧中央大学から上側の御茶ノ水までの駿河台、靖国通りは小川町交差点を境に須田町側は浅草橋近くまで、駿河台下の交差点を境に三省堂・すずらん通り・古本街の神保町と一ツ橋から九段下までは何故か爆弾が落とされなくて焼けてませんので今でも見覚えのある古い建物が当時のまま結構残っています。

空襲でも不思議なことに神田では神社のある所は、そのご加護のためか爆弾が落ちてません、小川町から錦町一帯は靖国通りの両側から広く神田橋まで、ひどく焼け崩れてしまったのに豊川稲荷神社のある電機学校の 1 区画と五十稲荷神社の 1 区画だけが焼けずに残ってました。

食糧難が回復途上の子供の頃には、入れてもらえた学校本館地下の食堂で 10～15 円で「うどん」が食べられ空腹を満たしていました、懐かしいです。

思い出して長々書いてしまいました、私の神田物語でした。